

▼軍縮會議に參加
政府は北米政府の提案に成る第
二次海軍を備給少に關する日英
米三國會議の招待に對し十日天
皇陛下の御裁下を仰ぎ参加する
旨正式回答した。(東京)
今回ローマ大學にファンスター講
座を設けることになり十六日盛
大な祝賀會が催され席上最初の
講師として選ばれた國粹黨總務
アウグスト・ツラチ氏登壇講話
座設置の目的を説明した羅馬

トス氏は全紙の報價を高めた在

職四年、一八八九年共和制の宣
言あり聖州臨時政府の組織さる
に當り書記官となる後州下院
議員に舉げられ一九〇九年州上
院に及んだ。

米副統領バナマ行
米國副統領チャールズ・ドウズ
氏はパナマ運河視察の途次玖瑪
に立寄つた。(ハバーナ)

▼西亞航空路開かれん
西班牙亞國間航空路開設に關し
最初より献身的の努力を拂つて來たヘーラ太尉は目下ソエ
ペリン商會技師長セガキリヤ
に滞在中なるが全氏の語る所に
依れば該航路初飛行に上るべき

飛行船はセガキリヤと命名さる
べく近くリオ市に中間着陸場を
設けることになつてゐる。

(マドリード)

伯國操船界の重鎮
ノスキツタ氏長逝

伯國言論界の雄オ・エヌタード
紙社長ジユリオ・ノスキツタ氏
は頃日肝痛を患ひ自宅に於て療
養中の處重患遂に死す去十五

日午後七時長逝し翌十六日午後
四時親戚知友及び多數の故人崇
拜家會葬コソンフラン墓地に埋
葬された享年六十六、氏は一八

六年八月十八日葡國人を父母
としてカムビーナス市に生れ一
八八三年廿一才にして聖市法科
大學卒業アッシス・ブラジル氏
ある、法大卒業後は故郷に歸り

辯護士新聞記者詩人として當時
トス氏の事務所に入つたが開
業して其所を辞し自立してガゼ
ツタ・デ・カムビーナス主宰、
ツ・シエル・印

トス氏の前身プロビンシア・デ・サン
バクロ紙の編輯記者となり敏腕
を揮つて全紙の報價を高めた在
職四年、一八八九年共和制の宣
言あり聖州臨時政府の組織さる
に當り書記官となる後州下院
議員に舉げられ一九〇九年州上
院に及んだ。

米副統領バナマ行
米國副統領チャールズ・ドウズ
氏はパナマ運河視察の途次玖瑪
に立寄つた。(ハバーナ)

▼西亞航空路開かれん
西班牙亞國間航空路開設に關し
最初より献身的の努力を拂つて來たヘーラ太尉は目下ソエ
ペリン商會技師長セガキリヤ
に滞在中なるが全氏の語る所に
依れば該航路初飛行に上るべき

飛行船はセガキリヤと命名さる
べく近くリオ市に中間着陸場を
設けることになつてゐる。

(マドリード)

伯國操船界の重鎮
ノスキツタ氏長逝

伯國言論界の雄オ・エヌタード
紙社長ジユリオ・ノスキツタ氏
は頃日肝痛を患ひ自宅に於て療
養中の處重患遂に死す去十五

日午後七時長逝し翌十六日午後
四時親戚知友及び多數の故人崇
拜家會葬コソンフラン墓地に埋
葬された享年六十六、氏は一八

六年八月十八日葡國人を父母
としてカムビーナス市に生れ一
八八三年廿一才にして聖市法科
大學卒業アッシス・ブラジル氏
ある、法大卒業後は故郷に歸り

辯護士新聞記者詩人として當時
トス氏の前身プロビンシア・デ・サン
バクロ紙の編輯記者となり敏腕
を揮つて全紙の報價を高めた在
職四年、一八八九年共和制の宣
言あり聖州臨時政府の組織さる
に當り書記官となる後州下院
議員に舉げられ一九〇九年州上
院に及んだ。

米副統領バナマ行
米國副統領チャールズ・ドウズ
氏はパナマ運河視察の途次玖瑪
に立寄つた。(ハバーナ)

▼西亞航空路開かれん
西班牙亞國間航空路開設に關し
最初より献身的の努力を拂つて來たヘーラ太尉は目下ソエ
ペリン商會技師長セガキリヤ
に滞在中なるが全氏の語る所に
依れば該航路初飛行に上るべき

飛行船はセガキリヤと命名さる
べく近くリオ市に中間着陸場を
設けることになつてゐる。

(マドリード)

伯國操船界の重鎮
ノスキツタ氏長逝

伯國言論界の雄オ・エヌタード
紙社長ジユリオ・ノスキツタ氏
は頃日肝痛を患ひ自宅に於て療
養中の處重患遂に死す去十五

日午後七時長逝し翌十六日午後
四時親戚知友及び多數の故人崇
拜家會葬コソンフラン墓地に埋
葬された享年六十六、氏は一八

六年八月十八日葡國人を父母
としてカムビーナス市に生れ一
八八三年廿一才にして聖市法科
大學卒業アッシス・ブラジル氏
ある、法大卒業後は故郷に歸り

辯護士新聞記者詩人として當時
トス氏の前身プロビンシア・デ・サン
バクロ紙の編輯記者となり敏腕
を揮つて全紙の報價を高めた在
職四年、一八八九年共和制の宣
言あり聖州臨時政府の組織さる
に當り書記官となる後州下院
議員に舉げられ一九〇九年州上
院に及んだ。

米副統領バナマ行
米國副統領チャールズ・ドウズ
氏はパナマ運河視察の途次玖瑪
に立寄つた。(ハバーナ)

▼西亞航空路開かれん
西班牙亞國間航空路開設に關し
最初より献身的の努力を拂つて來たヘーラ太尉は目下ソエ
ペリン商會技師長セガキリヤ
に滞在中なるが全氏の語る所に
依れば該航路初飛行に上るべき

飛行船はセガキリヤと命名さる
べく近くリオ市に中間着陸場を
設けることになつてゐる。

(マドリード)

伯國操船界の重鎮
ノスキツタ氏長逝

伯國言論界の雄オ・エヌタード
紙社長ジユリオ・ノスキツタ氏
は頃日肝痛を患ひ自宅に於て療
養中の處重患遂に死す去十五

日午後七時長逝し翌十六日午後
四時親戚知友及び多數の故人崇
拜家會葬コソンフラン墓地に埋
葬された享年六十六、氏は一八

六年八月十八日葡國人を父母
としてカムビーナス市に生れ一
八八三年廿一才にして聖市法科
大學卒業アッシス・ブラジル氏
ある、法大卒業後は故郷に歸り

辯護士新聞記者詩人として當時
トス氏の前身プロビンシア・デ・サン
バクロ紙の編輯記者となり敏腕
を揮つて全紙の報價を高めた在
職四年、一八八九年共和制の宣
言あり聖州臨時政府の組織さる
に當り書記官となる後州下院
議員に舉げられ一九〇九年州上
院に及んだ。

米副統領バナマ行
米國副統領チャールズ・ドウズ
氏はパナマ運河視察の途次玖瑪
に立寄つた。(ハバーナ)

▼西亞航空路開かれん
西班牙亞國間航空路開設に關し
最初より献身的の努力を拂つて來たヘーラ太尉は目下ソエ
ペリン商會技師長セガキリヤ
に滞在中なるが全氏の語る所に
依れば該航路初飛行に上るべき

飛行船はセガキリヤと命名さる
べく近くリオ市に中間着陸場を
設けることになつてゐる。

(マドリード)

伯國操船界の重鎮
ノスキツタ氏長逝

伯國言論界の雄オ・エヌタード
紙社長ジユリオ・ノスキツタ氏
は頃日肝痛を患ひ自宅に於て療
養中の處重患遂に死す去十五

日午後七時長逝し翌十六日午後
四時親戚知友及び多數の故人崇
拜家會葬コソンフラン墓地に埋
葬された享年六十六、氏は一八

六年八月十八日葡國人を父母
としてカムビーナス市に生れ一
八八三年廿一才にして聖市法科
大學卒業アッシス・ブラジル氏
ある、法大卒業後は故郷に歸り

辯護士新聞記者詩人として當時
トス氏の前身プロビンシア・デ・サン
バクロ紙の編輯記者となり敏腕
を揮つて全紙の報價を高めた在
職四年、一八八九年共和制の宣
言あり聖州臨時政府の組織さる
に當り書記官となる後州下院
議員に舉げられ一九〇九年州上
院に及んだ。

米副統領バナマ行
米國副統領チャールズ・ドウズ
氏はパナマ運河視察の途次玖瑪
に立寄つた。(ハバーナ)

▼西亞航空路開かれん
西班牙亞國間航空路開設に關し
最初より献身的の努力を拂つて來たヘーラ太尉は目下ソエ
ペリン商會技師長セガキリヤ
に滞在中なるが全氏の語る所に
依れば該航路初飛行に上るべき

飛行船はセガキリヤと命名さる
べく近くリオ市に中間着陸場を
設けることになつてゐる。

(マドリード)

伯國操船界の重鎮
ノスキツタ氏長逝

伯國言論界の雄オ・エヌタード
紙社長ジユリオ・ノスキツタ氏
は頃日肝痛を患ひ自宅に於て療
養中の處重患遂に死す去十五

日午後七時長逝し翌十六日午後
四時親戚知友及び多數の故人崇
拜家會葬コソンフラン墓地に埋
葬された享年六十六、氏は一八

六年八月十八日葡國人を父母
としてカムビーナス市に生れ一
八八三年廿一才にして聖市法科
大學卒業アッシス・ブラジル氏
ある、法大卒業後は故郷に歸り

辯護士新聞記者詩人として當時
トス氏の前身プロビンシア・デ・サン
バクロ紙の編輯記者となり敏腕
を揮つて全紙の報價を高めた在
職四年、一八八九年共和制の宣
言あり聖州臨時政府の組織さる
に當り書記官となる後州下院
議員に舉げられ一九〇九年州上
院に及んだ。

米副統領バナマ行
米國副統領チャールズ・ドウズ
氏はパナマ運河視察の途次玖瑪
に立寄つた。(ハバーナ)

▼西亞航空路開かれん
西班牙亞國間航空路開設に關し
最初より献身的の努力を拂つて來たヘーラ太尉は目下ソエ
ペリン商會技師長セガキリヤ
に滞在中なるが全氏の語る所に
依れば該航路初飛行に上るべき

飛行船はセガキリヤと命名さる
べく近くリオ市に中間着陸場を
設けることになつてゐる。

(マドリード)

伯國操船界の重鎮
ノスキツタ氏長逝

伯國言論界の雄オ・エヌタード
紙社長ジユリオ・ノスキツタ氏
は頃日肝痛を患ひ自宅に於て療
養中の處重患遂に死す去十五

日午後七時長逝し翌十六日午後
四時親戚知友及び多數の故人崇
拜家會葬コソンフラン墓地に埋
葬された享年六十六、氏は一八

六年八月十八日葡國人を父母
としてカムビーナス市に生れ一
八八三年廿一才にして聖市法科
大學卒業アッシス・ブラジル氏
ある、法大卒業後は故郷に歸り

辯護士新聞記者詩人として當時
トス氏の前身プロビンシア・デ・サン
バクロ紙の編輯記者となり敏腕
を揮つて全紙の報價を高めた在
職四年、一八八九年共和制の宣
言あり聖州臨時政府の組織さる
に當り書記官となる後州下院
議員に舉げられ一九〇九年州上
院に及んだ。

米副統領バナマ行
米國副統領チャールズ・ドウズ
氏はパナマ運河視察の途次玖瑪
に立寄つた。(ハバーナ)

▼西亞航空路開かれん
西班牙亞國間航空路開設に關し
最初より献身的の努力を拂つて來たヘーラ太尉は目下ソエ
ペリン商會技師長セガキリヤ
に滞在中なるが全氏の語る所に
依れば該航路初飛行に上るべき

飛行船はセガキリヤと命名さる
べく近くリオ市に中間着陸場を
設けることになつてゐる。

(マドリード)

伯國操船界の重鎮
ノスキツタ氏長逝

伯國言論界の雄オ・エヌタード
紙社長ジユリオ・ノスキツタ氏
は頃日肝痛を患ひ自宅に於て療
養中の處重患遂に死す去十五

日午後七時長逝し翌十六日午後
四時親戚知友及び多數の故人崇
拜家會葬コソンフラン墓地に埋
葬された享年六十六、氏は一八

六年八月十八日葡國人を父母
としてカムビーナス市に生れ一
八八三年廿一才にして聖市法科
大學卒業アッシス・ブラジル氏
ある、法大卒業後は故郷に歸り

辯護士新聞記者詩人として當時
トス氏の前身プロビンシア・デ・サン
バクロ紙の編輯記者となり敏腕
を揮つて全紙の報價を高めた在
職四年、一八八九年共和制の宣
言あり聖州臨時政府の組織さる
に當り書記官となる後州下院
議員に舉げられ一九〇九年州上
院に及んだ。

米副統領バナマ行
米國副統領チャールズ・ドウズ
氏はパナマ運河視察の途次玖瑪
に立寄つた。(ハバーナ)

▼西亞航空路開かれん
西班牙亞國間航空路開設に關し
最初より献身的の努力を拂つて來たヘーラ太尉は目下ソエ
ペリン商會技師長セガキリヤ
に滞在中なるが全氏の語る所に
依れば該航路初飛行に上るべき

飛行船はセガキリヤと命名さる
べく近くリオ市に中間着陸場を
設けることになつてゐる。

(マドリード)

伯國操船界の重鎮
ノスキツタ氏長逝

伯國言論界の雄オ・エヌタード
紙社長ジユリオ・ノスキツタ氏
は頃日肝痛を患ひ自宅に於て療
養中の處重患遂に死す去十五

日午後七時長逝し翌十六日午後
四時親戚知友及び多數の故人崇
拜家會葬コソンフラン墓地に埋
葬された享年六十六、氏は一八

六年八月十八日葡國人を父母
としてカムビーナス市に生れ一
八八三年廿一才にして聖市法科
大學卒業アッシス・ブラジル氏
ある、法大卒業後は故郷に歸り

辯護士新聞記者詩人として當時
トス氏の前身プロビンシア・デ・サン
バクロ紙の編輯記者となり敏腕
を揮つて全紙の報價を高めた在
職四年、一八八九年共和制の宣
言あり聖州臨時政府の組織さる
に當り書記官となる後州下院
議員に舉げられ一九〇九年州上
院に及んだ。

わたのはなし

六

(四、化學部) 完備せ

る實驗室の設置等、尙試驗場に

は精綿機、種子消毒所を設ける

こと、試驗場の収入は特別積立

金として試驗場の費用に充當す

ること等

(ハ)セメント耕地 州政府は

州内棉作の進歩發達を助成する

目的で必要に應じセメント耕地

を設けること而して該耕地は特

に棉作地帯又は將來棉作地帯た

るべき可能性ある地方に限ること

と、面積は最少限度八十アルク

レス健康地であつて農家の觀察

に便なる所なるべきこと、技術

上に關しては中央試驗場に隸屬

し其處より種子の配布を受くべ

きこと、支配人は經驗ある農業

技術師たるべきこと、耕地は中央

試驗場の指圖に従つて棉作と各

種類につき其經濟上氣候上並に

農學上の諸項に關する比較研究

をすること、最も經濟的に有利

な種類の種子は可及的多くの農

家に頒布すること、機械農業の

奨励より循環耕作、害虫驅除、

試験場の指圖に従つて棉作と各

種類につき其經濟上氣候上並に

農學上の諸項に關する比較研究

をすること、最も經濟的に有利

な種類の種子は可及的多くの農

家に頒布すること、機械農業の

奨励より循環耕作、害虫驅除、

試験場の指圖に

十手物語
田村四男

海賊

「實は已が寄つたのは他

の事でも無えが、遅々に觀音丸

で伊豆の下田へ大分荷を送る

ふ話だが、觀音丸はケチが付

いて居る船だから、止めたら何

うかと思つて。それを言ひに來

たんだ」

「ケチと申しますと、何んでし

たつけ」

「物覺えの悪い男ぢやねえか、

去年の七月三日、神奈川沖で海

賊が襲つて、大阪からの高價な

積荷を皆な盗んで、船頭四五人

は殺され生きて居る者は踏絆ら

れ、櫓櫂操る者もなく、千

葉の富津へ押流されたのは、お

の觀音丸ぢや無えか、其後品川

沖の度々の難も觀音丸ばかりぢ

やないか、こんな事を言つちや

開けないと言ふかは知らねえが

貰えてんた、ねえ番頭さん、醉

から、己はそれを言つて觀音丸

でやる事だけは、何つか止めて

お前さんから藤吉は斯う（言

つた。とよく言つてお吳んなさ

い、眞剣だよ）

禿頭の赤い顔の番頭は、始め

て氣が附いたやうに、ぼんと膝

を叩いて、左様です觀音丸は

して居ましたよ、うつかり

ものですね）

と帳場格子の上で頬杖をつく

て、香爐を打撃され、亭主は實に

「だから、擔ぎたくないちや無

えか」

「所が荷は皆な積み出して丁ひ

上、香爐を打撃され、亭主は實に

「二十駄ばかりですか？」

「二十駄にしろ主人の物だ。若

し間違ひがあつたら、大將に済

まないぢやないか深川へばかり

朝詣をかこつけに、一つ切違び

ばかりしてゐないで、確乎頼む

ものぢやないか」

藤吉は醉眼朦朧と四邊を見

ふ知らせがあつたせ）

と、藤吉は惜まれ口のやうな

愛嬌のやうな事を言つて、番頭

をひやかした

（藤吉さんは直ぐ深川を引合ひ

に出すが、私は深川の見當だつ

て知りませんよ。知らない人は

眞實かと思ひますせ）

「それに、己は未だ柔じられて

ならねえのは其船には藏前の分

を言つた方が善いよ、時に今夜

出でるのは止めたいのです、且

那に左様申しませう）

（お話を伺ふと觀音丸で荷を

出すのは止めたいのです、且

無理が少く、後世の如き青酸な

ものが狂ふし、お前さんの所さはそ

がね）

（二十駄にしろ主人の物だ。若

し間違ひがあつたら、大將に済

まないぢやないか深川へばかり

朝詣をかこつけに、一つ切違び

ばかりしてゐないで、確乎頼む

ものぢやないか）

（藤吉は醉眼朦朧と四邊を見

ふ知らせがあつたせ）

と、藤吉は惜まれ口のやうな

愛嬌のやうな事を言つて、番頭

をひやかした

（藤吉さんは直ぐ深川を引合ひ

に出すが、私は深川の見當だつ

て知りませんよ。知らない人は

眞實かと思ひますせ）

（それに、己は未だ柔じられて

ならねえのは其船には藏前の分

を言つた方が善いよ、時に今夜

出でるのは止めたいのです、且

那に左様申しませう）

（お話を伺ふと觀音丸で荷を

出すのは止めたいのです、且

無理が少く、後世の如き青酸な

ものが狂ふし、お前さんの所さはそ

がね）

（二十駄にしろ主人の物だ。若

し間違ひがあつたら、大將に済

まないぢやないか深川へばかり

朝詣をかこつけに、一つ切違び

ばかりしてゐないで、確乎頼む

ものぢやないか）

（藤吉は醉眼朦朧と四邊を見

ふ知らせがあつたせ）

と、藤吉は惜まれ口のやうな

愛嬌のやうな事を言つて、番頭

をひやかした

（藤吉さんは直ぐ深川を引合ひ

に出すが、私は深川の見當だつ

て知りませんよ。知らない人は

眞實かと思ひますせ）

（それに、己は未だ柔じられて

ならねえのは其船には藏前の分

を言つた方が善いよ、時に今夜

出でるのは止めたいのです、且

那に左様申しませう）

（お話を伺ふと觀音丸で荷を

出すのは止めたいのです、且

無理が少く、後世の如き青酸な

ものが狂ふし、お前さんの所さはそ

がね）

（二十駄にしろ主人の物だ。若

し間違ひがあつたら、大將に済

まないぢやないか深川へばかり

朝詣をかこつけに、一つ切違び

ばかりしてゐないで、確乎頼む

ものぢやないか）

（藤吉は醉眼朦朧と四邊を見

ふ知らせがあつたせ）

と、藤吉は惜まれ口のやうな

愛嬌のやうな事を言つて、番頭

をひやかした

（藤吉さんは直ぐ深川を引合ひ

に出すが、私は深川の見當だつ

て知りませんよ。知らない人は

眞實かと思ひますせ）

（それに、己は未だ柔じられて

ならねえのは其船には藏前の分

を言つた方が善いよ、時に今夜

出でるのは止めたいのです、且

那に左様申しませう）

（お話を伺ふと觀音丸で荷を

出すのは止めたいのです、且

無理が少く、後世の如き青酸な

ものが狂ふし、お前さんの所さはそ

がね）

（二十駄にしろ主人の物だ。若

し間違ひがあつたら、大將に済

まないぢやないか深川へばかり

朝詣をかこつけに、一つ切違び

ばかりしてゐないで、確乎頼む

ものぢやないか）

（藤吉は醉眼朦朧と四邊を見

ふ知らせがあつたせ）

と、藤吉は惜まれ口のやうな

愛嬌のやうな事を言つて、番頭

をひやかした

（藤吉さんは直ぐ深川を引合ひ

に出すが、私は深川の見當だつ

て知りませんよ。知らない人は

眞實かと思ひますせ）

（それに、己は未だ柔じられて

ならねえのは其船には藏前の分

を言つた方が善いよ、時に今夜

出でるのは止めたいのです、且

那に左様申しませう）

（お話を伺ふと觀音丸で荷を

出すのは止めたいのです、且

無理が少く、後世の如き青酸な

ものが狂ふし、お前さんの所さはそ

がね）

（二十駄にしろ主人の物だ。若

し間違ひがあつたら、大將に済

まないぢやないか深川へばかり

朝詣をかこつけに、一つ切違び

ばかりしてゐないで、確乎頼む

ものぢやないか）

（藤吉は醉眼朦朧と四邊を見

ふ知らせがあつたせ）</